

いのちの水

目次

- ・ 思いがけないこと 1
- ・ 見よ、私は万物を新しく 2
- ・ 弱きを顧みる者の祝福 詩 4
- ・ 導きの神 9
- ・ 生きている神様に導かれて 無教会全国集会での証し 中川陽子 12
- ・ ことば 17
- ・ お知らせ 17
- ・ 冬季聖書集会、来年の全国集会、サムエル記、申命記の聖書講話(MP3版)の発売等



あなた方みんなの中で、いちばん小さい者こそ、大きいのである。(マタイ福音書9の48より)

二〇一五年 十一月号 六五七号

思いがけないこと

この世は思いがけないことで満ちている。

国内外で起きる突然の事故、病気の宣告、災害、身近なところでの親しかった人の心の変質…等々。つい数カ月前までは思いもよらなかったような苦難がふりかかってくることもある。

他方では、予想しなかった良きことも与えられる。思いがけない善き人との出会い、治らないと思っていた、あるいはもうあまり命がないと思われていた病気がいやされる、キリスト教に関心なかった人が、意外なきっかけからキリストを信じるようになったこ

と、あるいはずっと途絶えていた友との関わりがもう回復しないだろうと思われていたにも関わらず、予想してい

なかったことからよい関係が回復すること、生活のなかで、重く暗い気持ち、あるいは悲しみにうちひしがれているとき、思いがけない人からの電話や音信によってさわやかな風が心を吹き抜ける 等々、さまざまの思いがけない良きことが生じることもある。

聖書においても、悪しきこと、苦しいことが突然生じること、も記されている一方で、本当によきことが思いがけなく与えられるということも記されている。

キリストの弟子たち ペテロ

やヨハネ、ヤコブなども漁師であってその仕事の中に、思いがけなくイエスがとおりかかり、私に従え、と呼びかけられた。その短い呼びかけが生涯を変革するものとなり、また彼らのはたらきは、キリスト教が世界に伝わっていくための重要な基礎となった。

キリスト教迫害をしていたパウロは、突然に天よりの光が射ってきて、それまでのまちがいをはっきりと知らされ、新たな人と作り変えられ、福音伝道に生涯をかける人物となって、その書いたものが聖書として世界中にて読まれるようになった。

さらに、旧約聖書、新約聖書ともに記されている重要なこと、それは突然にして、世の終わりが来ることである。

世の終わり、それは、悔い改めずに、真実や愛に反することを意図的に犯し続ける者にとっては裁きの日であり、罪

を知ってその赦しを得ようと主を仰ぎ続けているものにとつては、究極的な救いの日である。

「ここにも、裁きを受け、苦しみを受けるということ、逆に生涯で最もよきこと、復活してキリストのような栄光に輝く者と変えられることも突然に起こると記されている。

「このように、私たちの心の中に、そして身近な生活からさらに日本や世界に生じる大きな出来事は、みな人間が予想できないかたちで突然に生じる。さらには、この世界、宇宙そのものが新しい天と地に変えられるという私たちの想像をはるかに超えた出来事もまた、突然にして生じるといわれている。

それゆえに、主イエスは「目を覚ましていなさい」と繰り返し言われた。

その日、そのときは誰も知

らない。…父(神)だけが御存じである。気をつけて目を覚ましていなさい。

「いつ主人(神)が帰ってくるのかあなた方には分からないからである。主人が突然帰って来て、あなた方が眠っているのを見つけるかもしれない。あなた方に言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。(マルコ福音書13の32、36より)」

「このようにさまざまの善きこと、悪しきことも突然に生じる。これはいかなる人間もこの世界を支配することはできないということを神が示そうとされているのを思わせる。人間をはるかに超えた存在である神が御支配なさっているゆえに、私たちから見るとき突然に生じた、というように思えるのである。

「この闇と混沌、空虚や荒廃のある世にあって、私たちの最

終的希望もまた、その神の突然に起こす力にある。

どんなに腐敗や混乱があっても、全能の神ゆえにそうしたことにかかわらず、世の終わりと呼ばれるときには、突然にそのような事態が変えられる。それが聖書が繰り返し私たちに語りかけているメッセージである。

見よ、私は万物を新しくする 混沌の世にあって

「この世界は混沌としている。混沌とは、辞書によれば「入りまじって区別がつかず、はっきりしないさま」と説明されている。「勝敗の行方は混沌としている」「敗戦直後はすべてが混沌の中にあつた」「日本の行方はたしかにどうなるのか誰もわからない。日本だけでなくこの世はどこに向っていくのかわからない。

聖書の最初に記されていることは、混沌である。

「初めに神は天地を創造された。地は混沌であつて闇が深淵の面にあつた。(創世記1の1、2より)」

現代の私たちが直面している混沌をもすではるかな昔から洞察していたのがうかがえる表現である。

創世記で最初に記されている状況は、区別がつかないとか、はつきりしないといった状況はもちろんのことであるが、それとはややニュアンスの異なる意味を原語は持っている。そのことは、ほかの日本語訳聖書や英訳などを参照するとわかる。

新共同訳では、「混沌としていた」という箇所は他の日本語訳では、次のように訳されている。

・地は茫漠として何もなかつ

た：(新改訳)

・地は形なく、むなしく…
(口語訳)

双方とも、混乱して方向性が
ないと状態であるというより、
空しい、形がない、といった
ニュアンスで訳されている。
英訳なども、いずれも形がな
い、空虚であるという訳語が
用いられている。(*)
それは方向性がわからない、
というのとはやや異なるニュ
アンスを持っている。

(*) 英訳の一部が。
・without form, and void (KJG)
・formless and empty, (NIV)
・formless void, (NJB)
・waste and void (YLT) void と
は、空虚、空しいなどの意。

この混沌と訳された言葉の原
語の意味(*)は、空虚、何
もない、茫漠としている(内
容がはつきりしない)である。
この原意から見ると、いつ
そう神からの風と光の重要性

が浮かび上がってくる。

そうした空虚、混乱、荒涼と
したという状況を、根本的に
新しくするために神は光を創
造された。そして同時にそこ
には神の風が吹いていた。
海や陸地あるいは太陽、生物、
天体などを創造するよりまえ
に、空虚で荒涼としていると
ころに神の光を与えた。

それは空しさや荒れ果てた状
況を根本的に新しくするのは、
何よりも神の光であり、神の
霊(風)ということを示して
いる。

(*) ここで混沌と訳されている原
語は、トーフとポーフという二
語から成っている。
旧約聖書においては、トーフは2
0回使われ、ポーフは3回しか使
われていない。
トーフは次のように用いられてい
る。

・不毛の地(荒涼の地)申命記32の
10
・空しい、useless サムエル記
12の21

・荒れ地(ヨブ記6の18)

次にポーフは、旧約聖書では3回
だけ用いられ、創世記、イザヤ書、
エレミヤ書に各一回ずつである。
…私が地を見ると、見よ、茫漠と
して何もなく、天を見ると、その光
はなかった。(エレミヤ書4の23)
「茫漠として」の原語は、トーフ
であり、「何もなし」はポーフ
という語であり、ここは、創世記の
最初の箇所と同じでこの二語が重ね
られている。

それゆえに、新たに生まれ変
わる、聖霊によって新しく生
まれることの重要性を説いて
いるヨハネによる福音書もそ
の最初に、この命の光を指し
示しているのである。

…言(ことば) キリストを意
味する)の内に命があった。
命は人間を照らす光であった。
(ヨハネ1の4)

…あなた方に真理を告げる。
人は新たに生まれなければ、
神の国を見ることはできない。

霊から生まれるものは霊であ
る。あなた方は新たに生まれ
なければならぬ、と言った
ことに驚いてはいけぬ。

(ヨハネ3の6より)
パウロもつぎのように書いて
いる。
…だから、わたしたちは落胆
しない。

たといわたしたちの外なる人
は滅びても、内なる人は日ご
とに新しくされていく。(コ
リント4の16)

パウロ自身、キリスト者をき
びしく迫害し、捕らえ、国外
にまで追跡し、さらには殺す
ことまでしていたほどに、彼
の心は、キリストの真理に関
しては無であり、荒れていた。
その混沌としていた彼の魂の
世界を根本的に新しくしたの
は、キリストの光であった。
万物を新しくする このこと
は、はるか後のいつかわから
ないこの世の終わりのことだ、

しかもそれはそんなことが実際にあるのかどうかと疑う人も多い。

しかし、私たち一人一人の魂のなかに、根本的に新しいものを創造してくださるのが神であり、キリストであり、その光であり、そのみ言葉である。

そのことを少しでもじっさいに体験してきた者は、その神の力の大きいなることを深く知らされるがゆえに、万物を新しくする神の力をも信じるこ

とができるように導かれる。使徒たちも、復活したキリスト、聖霊を受けて初めて根本的に新しくされた。それまでは三年間あらゆる奇跡やキリストの行動、その教えを聞いていてもなお、自分が上に立ちたいといった欲望をおさえきれず、また十字架でイエスが死ぬなどあつてはならないと、イエスの発言を叱責するなどしたほどだった。

： 割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。(ガラテヤ 6の15)

： だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。(コリント 5の17)

聖書という二千ページを超える膨大な内容をもった書物の最初に、混沌、空虚、荒廃が記され、それを打ち破るものとしての神からの風(神の霊)、光が記されている。

そしてその聖書の最後に置かれた黙示録にも、その神の霊と命、光そのものであるキリストが再び来られて、新しい天と地という、完全な世界への変革を待ち望む祈りで終えられている。

万物を創造した神であるからこそ、神の御計画のとき

の日、主の日 が至るときには、現状がいかに混乱し、どうにもならない状況であろうとも、その万物をまた新たにされるということ信じることができ。

それは、私たちもまた心においても体においても弱く、衰えていき、ついには滅びてしまふものにすぎないにもかかわらず、そのような者をも神の全能の力によって復活させていただき、キリストの栄光のからだへと変えてくださるという驚くべき約束が与えられているのと同様である。

弱き者を顧みるものの祝福 詩篇 41

いかに幸いなことが
弱いものに思いやりのある人は。

災いのふりかかるとき
主はその人を逃れさせてくださる。
主は、その人を守って命を得

させ

この地で幸せにしてください。
あなたは、そのような人を、敵に引き渡されぬ。

主は、その人が病の床にあるとき、支え
病気のときには、そのすべての病をいやしてください。
(1-3節)

詩篇 41 編は第一巻の終わりの詩。第二巻の終わりは 72 編、また第三巻の終わりは 89 編で、すべて最後に「主をたたえよ」という祈りで終わっている。このように区切りごとに祈りが書かれてある。

このような構成からも、主への感謝、賛美ということの重要性を知らされる。わたしたちも何かの区切りごとに、何ができてできなかったときでも、また良くても悪くても、絶えず神様を賛美する、いつも喜び、感謝するということへと導かれている。
私たちにとってのごく身近な

区切り、それは一日の初めと終りとである。その区切りのときに、私たちも新たな一日の祝福を祈り、主が守っていて下さることを感謝し、また一日の終りには、一日の守りと恵み、そばにいてくださったことを感謝し、神のわざを賛美して眠りにつくことができたらと願う。

この詩篇の最初の部分を、口語訳では「貧しい者をかえりみる人は幸いだ」と訳している。原文では「アシュレー」という言葉からはじまっている。このアシュレーとは、「いかに幸いなことが、何と祝福されていることか!」といった意味であり、間投詞なのであり、強調された表現となっている。

区切り、それは一日の初めと終りとである。その区切りのときに、私たちも新たな一日の祝福を祈り、主が守っていて下さることを感謝し、また一日の終りには、一日の守りと恵み、そばにいてくださったことを感謝し、神のわざを賛美して眠りにつくことができたらと願う。

この詩篇では、まず、弱者(貧しき者)を顧みる人への祝福が言われている。後に主イエスが山上の垂訓で言われた「憐れみ深い人は幸いである。その人は憐れみを受け」という言葉を思い起こさせる。

私は信仰が与えられ、キリストが私のうちに来てくださった。私には、一般社会で無視されてくるようなもの、小さきものへの関心が自然に生まれてきた。それゆえに、高校教員となつてみ言葉を伝えようという思いが起されたのちに、高校では一般的には顧みてこられなかったといえる夜間の定時制高校に勤めたいという気持ちが生まれてきた。

私は高校は、県下全域から集まる徹底した進学校に学んだが、その高校のすぐそばにある盲学校のことは、その進学校ではただの一度もその盲学校のことを話す先生方はいなかった。

また盲学校という制度ができていかなかった時代は、生まれてきた全盲の人は家族からさえ疎んじられることがあり、周囲の世間の目をおそれて、特定の部屋に閉じ込められて長年過ごす、という非人間的

なことさえ、一部では行なわれていた。

主イエスは、こうした世間の目に隠れた弱いもの、苦しむ者たちに、手を差し伸べられ、祝福を与えられるお方である。

私たちも、第1編にあつたように、いつも神の言葉を愛して心に思っているなら、神の言葉とは神ご自身のお心から出たものであるゆえ、そして、神は弱いものを思いやるお方だから、そのような方向へと導かれる。

主は病気のときには、そのすべての病をいやしてください。

これは、新共同訳では、「主は、病の床にあるとき、立ち直らせてください。」(4節)と訳され、祈願文として訳されている。しかし、他の訳では、「病をことごとく癒される」(口語訳)と、神への確信として訳され、また、英訳でも、「病気のときには、あなた(主)は、すべての弱さを癒される。」

・ in their illness you heal all their infirmities. (MRS) などのように、やはり神のわざへの確信として訳されているのが大部分である。(*)

(*) 詩篇ではこの詩にかぎらず、確信として訳されている箇所が、新共同訳では、祈願文として訳されているところがしばしばある。例えば、3節、4節のように「してくださ」と祈り願う訳とされているのと「してくださる、して下さった」という事実または確信を言っている訳とにわかれていた。

詩篇を読むときには、この点に注意して読む必要がある。どうしてこのように訳が分かれるのかというと、ヘブライ語では、一般的には、まだ起こっていないこと、祈願や命令など、また繰り返し起こることには未完了形を使うが、未来のことも確実なこと、強調されるときには、完了形を使うことがあり、現代語のように、未来のことは未来形、過去のことは過去形、いま終わつたばかりとかその結果が持続しているときには、現在完了形、祈願のことは祈願文 等々のようにはつきりと分けられていない。そのため、日本語に訳するときに、それを訳する人によって変わってくる。

この箇所を、「してください」と祈願として訳しているのは少数で、多くの外国語訳は「してください」と

訳して神の救いへの確信をあらわす表現となっている。2節で確信を言っているのが、3、4節もそのように受けとることができる。

これが貧しい者に配慮する人の受ける具体的な幸いで、その人が病の床にあつても立ち直らせてくださるといふ祝福が記されている。

主よ憐れんでください 自分の罪の赦しを願う

2、4節では一般的なことが書かれていたが、5節からは主語が一人称になって個人的な体験を言っている。

主よ、憐れんでください。あなたに罪を犯した私をいやしてください。

「主よ憐れんでください」という切実な叫び、祈りは、詩篇や福音書など多くの箇所で見られる。

ヘブル語の原文では「ホナー二 エロヒーム」という2語

であらわされる。憐れむ「ハーン」の命令形に、「私を」という接尾辞がついた形である。

この言葉は、ギリシャ語は「キユーリエ エレーソン」(*)として、主イエスに対して全盲の人や重い病氣の人が、主よ憐れんでください!と必死に叫ぶときの言葉として現れる。

(*) キユーリエとは、キユーリオス(主)の呼格で、「主よ」という呼びかけのときの形。また、エレエソンは、エレエオー 憐れむの命令形。

例えば、つぎのように、ハンセン病でひどい差別と病氣の苦しみにあえいできた人が、主イエスに出会ったときに叫んだのがこの言葉である。

声を張り上げて、「イエスさま、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。(ルカ17の11)

また、街角で乞食をして生計

をかるうじてつないでいた盲人がイエスが通り掛かったのがわかったとき、彼は、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んだ。(ルカ18の38)

これは、「キリエ エレイソン」という発音となつて、ミサ曲にもこの言葉は多く使われていて、昔からこの一言は重要であつた。

どんな苦しい人でも、この叫びはできる。また「ハーナン」

から、主は憐れみ深いお方、恵み深いお方だということ。「ハンナ」という名前ができ、ヨハンナ、ヨハネ、あるいはフランス語ではジャン、ジェーンなどという発音として多くの女性の名前に採用されることになつた。こうして名前という形で、「主は憐れみ深いお方である」ということが、全世界に反響し続けている。

人間は自分のことは気づかず、他者の欠点や罪によく気付く。

さんに苦しめられた、嫌なことをされた、などということはだれでもそんな気持ちを持ちやすい。しかし、そうした他者の罪を思うと同時に、みずからは罪がないのか、自分分は本当に神が私たちにくださったっているような愛を持つて

いるのか、不正なことにはつきり否という勇氣、正しさを持つているのか、真実な心をもって人に対してきたのか等々のあるべき姿からはずれているということ 罪を知らねばならない。

この詩の作者は、他者からの攻撃や敵視を受けつつも、そのただなかで、前述のような意味での罪を犯した自分を癒してくださいというところに憐れみを求めている。これは聖書でなければこういう発想は起こらないだろう。

： 敵は私を苦しめようとして言つ。

「いつ、彼は死に、その名は

滅びるのだろうか。」(早く死んでその名も消え失せるがよい 新共同訳)

見舞いに来れば、むなしいとを言いますか

心に悪意を満たし、外に出ればそれを口にします。

わたしを憎む者は皆、集まつてささやき

わたしに災いを謀っています。「呪いに取りつかれて床に就いた。二度と起き上がれまい。」

わたしの信頼していた仲間

わたしのパンを食べる者が威張つてわたしを足げにします。(6~10節)

す。

敵対者は、相手の命がうしなわれることを願う。人間は、相手の命が少しでもよりよいものになるように祈り願うのが本来の姿であるのに、現実には、逆の心がしばしば人間の心によぎる。憎しみはそのよ

とがある。

そして、殺すことと本質的に同じこととされる憎しみは、子どもですら持つてしまつともある。

誰かに対して、「いつ、は死ぬのだ、早く死んだらいいのに」などというような気持ちを持つことは、なんと悲しいことだろう。神は私たちに命を与え、その命がさらによりよいものになるようになることを願つておられるゆえに、私たちも自分や他者にそのことを求め続けるのが本来の姿であるのに。

人間とは、他者の苦しみを少しでも和らげようとするのが本来であるが、悪の霊に支配されるようになるとき、逆に相手の苦しみが増すことを願うようにさえなっていく。

10節にあるように、かつては信頼し、ともに食事をするような間柄であつた人が、思いがけなく敵対者となる。この世はそのような不条理な世

界だということが言われている。この詩が作られてから数千年も経った。しかし、こうした人間の心の深い闇、罪ということは変ることがない。

ともにパンを分け合うような親しい間柄であった。それなのに、今は私に敵対している。友はこんなにも豹変してしまった。これが人間の現実である。

「こつこつ」ことを思い知らされると、だから人間は醜いと落胆してしまふ。とくに老年になつてこのような人間のけわしい現実を思い知らされると、深い悲しみに陥る。もし神への信頼を持つのでなければ、こうした人間の現実に直面するとき深い打撃を受けて立ち直ることも難しい状態になるだろう。

しかし、人間の罪深い実態を深く思い知らされ、だからこそその闇を照らし、救いだしてくださる神に向かおうとする。そのためにもこのような経験も与えられている。それゆ

えにこのような経験をすることも、主にあつては、重要な経験であつて、その苦しみのゆえに、そこからの救いを求めて神に、真剣に向かうようになる。

主イエスはこの41篇をご自身のことに関係づけて用いられた。主イエスの弟子にもこのような驚くべき裏切り、背信行為が生じることになつた。「わたしのパンを食べている者が、私を逆らつた」とという言葉が実現されなければならぬ。(ヨハネ十三・18)

詩篇は単なる人間の感情を表すだけでなく、深い神様の御意志が表れている。詩篇は大いなる預言書でもある。非常にくるしいことであるからこそ、主イエスもこれを苦しい経験として通つていかれた。

神を信じて、ともにパンを食べ歩いて歩んでいったのに、あるときから突然裏切り、さらに自分に対して憎しみを持ち、敵意を抱くような状態に変わつ

ていく。このように人間世界のはかなさ、空しさ、そしてしかし、ここから神様を仰ぐ大きな入り口があるんだと知らされる。

だから、いつも感謝せよといわれている。このような目に遭つても、神様のほうに立ち返るとき、神の国への道を確実に上つていくことができる。

この詩の作られた時代には、次のようにまだ部分的に深い啓示が与えられなかつたところがある。

…どうか私を憐れみ、起き上がらせてください。
そうすれば、彼らを見返すことができません。(11節)

このような、敵対者への仕返し、の心、敵を憎む心を根本的に改革するために主イエスがこられた。「あなた方は、敵は憎めと教えられてきた。しかし私は言うのだ。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」(マタイ5の43、44)

このようにいかなる相手に対しても、あくまで神の愛をもつてその人がよくなるように、悪を行なう人が滅びるのでなく、その悪人に宿る悪そのものがなくなるようにとの祈りである。それによつてのみ悪人はよき人間となるからである。

新約聖書の時代になつてからは、このように、見返すとか復讐の心ではなく、神の力のそんで相手が変えられるようにとの祈りの心を持つて見つめるようにと教えられている。

旧約聖書ではこのように、新約聖書の主イエスの精神や教えからすれば、その高いレベルに達していない状態が折々に見られる。これは当然のことであつて、究極的真理は徐々に段階的に啓示され、キリストに至つてはじめて完全な啓示が示されるようになったのである。

これが、使徒パウロが折々に

記している、キリストこそが最終的な啓示であるということである。

：世のはじめから代々にわたって隠されてきた奥義（*）が、今や、聖徒（キリスト者）たちに明らかにされた。

この奥義が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを神は彼らに知らせようとした。この奥義こそは、あなた方のうちにおられるキリストである。（コロサイ書 1の26～27より）

（*）奥義：原語は、ミユステリーオンで、口語訳、新改訳などでは奥義と訳されてきたが、新共同訳では「神の秘められた計画」と訳されている。科学や哲学、あるいは経験ではわからない霊的な真理のことを、この語であらわしている。それゆえ、キリストの十字架の死による罪の赦しや、死者の復活、あるいは再臨といったこと、さらに右に引用した箇所のように、キリストそのものが、ミユステリーオンだといわれる。

詩篇やほかの旧約聖書に見ら

れる一部の表現が、現代の私たちにはそぐわないからといって、それを読まないのは大きな損失である。

それらをも知ることです。その旧約聖書から新約聖書、キリストへの大いなる変化というものがよくわかるし、また旧約聖書そのものが、さまざまな意味でキリストを指し示すものであることがより鮮明に受け取れるようになるからである。

：私は知る、私は神の御旨にかなうのだと。敵が私に対して勝つことはないのだと。

この作者は最後に、神の力によって悪に勝利する、という確信をのべている。神の助けを叫び求める者に力を与え、悪の力に呑み込まれないようにしてください。そうして悪の力は決して神により頼む者を滅ぼすことはないのだという確信で終わっている。

：あなたはわたしの全きによって、わたしをささえ、とこしえにみ前に置かれます。（口語訳）（*）

（*）ここでも、新共同訳は、「無垢な私を支え、とこしえに、御前に立たせてください。」という祈願に訳しているが、ほとんどの英語訳などは、次に引用したように、救いの確信として訳している。

・ In my integrity you uphold me and set me in your presence forever. (NIV)
・ ... You have set me in your presence forever. (NRS)

「私の全き」の全きとは、原語はトームで、これは、誠実、高潔、全きことなどの意味に用いられる。（ヨブは全き人であったなど）

ここでは、苦難のおりにも、神に精一杯信頼し、神のみに頼り、祈り求めてきたそのことをさしているので、神への真実な思いをもってきたゆえに、主が私を支え永遠に御前に置いてくださる という喜

ばしい確信をのべている。

導きの神

聖書に記されている神の特質は、導きの神であるということとである。聖書における神は特定の建物にだけいるとか、ギリシャの哲学者たちが語っている真理（イデア）のようなものでもない。

それは、至るところに存在している、しかも、生きてはたらく神、私たちを導く神であるということである。

このことは、聖書の全体にわたって、さまざまに表されているが、つぎの箇所もその一つである。

： イスラエルの聖なる神、あなたを贖う主はこう言われる。

わたしは主、あなたの神、わたしはあなたを教えて力をもたせ

あなたを導いて道を行かせる。私の戒めに耳を傾けるなら

あなたの平和は大河のように
恵みは海の波のようになる。

あなたの子孫は砂のように
あなたから出る子らは砂の粒
のように増え

その名はわたしの前から
断たれることも、滅ぼされる
こともない。(イザヤ書48
の17〜19)

この詩は捕囚(紀元前586
年頃〜538年)となつたユ
ダの人々が、ペルシアの王キュ
ロスによって、神殿の器具ま
でもつけて帰国が許可される
こととなつたという歴史的状
況のなかで書かれた。

しかし、それは1500キロ
もあるような砂漠地帯の旅で
あつて、途中にどんな困難が
あるかわからない。

そのときに言われた神の言葉
がここに記されている。

かれらに語りかけた神、それ
は、初めであり、終わりであ
る、天地万物を創造したお方
である。さらに、聖なる神で

あるとともに、私たちをあが
なつてくださるお方。さらに、
教え、困難のただなかを導い
てくださるお方である。

ここに記されていることは、
直接には、いまから2500
年あまりも昔のことである。

しかし、旧約聖書の特質 聖
書全体の特質は、特定の時代
のある人たちに言われたこと
ばでありながら、それがさま
ざまの民族や、世代の人々に
あてはまるといふことである。
しかも、何千年も越えてその真
理性は衰えることがない。

そのような神が、イスラエル
の人たちを捕囚の地から、約
束の地へと導くのである。

現代の私たちも、また、罪の
捕囚の状態から約束の地 す
なわち神の国へと導かれてい
く。

そして、そこは平安と正義が
流れ来るもの、繰り返し押し
寄せてやまないものとして言
われている。

平安 シャーロームとは、シャ

ラム 完成する、全うするとい
う動詞の名詞の形である。

(*) それゆえに完成された
状態、神のよきものによつて
満たされた状態を意味する。

(*) シャーラムという動詞は次の
ように使われている。「ソロモンは
神殿を完成した」(列王記上9の2
5)「あなた方の神、主に誓つてそ
れを全うせよ」(詩篇76の12)

旧約聖書においては、それは
物質的な豊かさ、ぶどうやオ
リーブ、いちじく、小麦など
の農作物の豊かさをも意味し
ていた。さらに霊的には、そ
れは、そうした目に見える作
物にたとえられる霊的賜物
力や愛、真実、正義、永遠性、
清さ等々を意味している。
そうした豊かさが与えられる
という。

それが単に豊かに与えられる
といわずに、平和は川のように
にと言われているのはなぜか。
イザヤに啓示されたのが流れ
続ける川のようにシャーロー

ムが与えられていく、という
ことなのである。

平和は流れるとはふつとまず
言わない。それは静かにとど
まっているものだからである。

それはその豊かさを意味して
いる。じつと流れないでとど
まる池や湖のようではなく、つ
ぎつぎとあらたに流れてくる、
そしてさらに遠くへと流れて
いく、それほどに豊かという
ことなのである。シャーロー
ムということとは特定のところ
にとどまるのではなく、周囲へ、
また後の時代へと絶えず流れ
てうるおしていくものなので
ある。

このような動的な豊かさ、そ
れは、神の言葉についても言
われている。

雨も雪も、ひとたび天から
降れば、むなしく天に戻るこ
とはない。それは大地を潤し、
芽を出させ、生い茂らせ、種
蒔く人には種を与え、食べる
人には糧を与える。

そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。(イザヤ書55の10～11)

「こ」でも、神の言葉は、ひとりのところまでどまっているのではなく、それはあふれ出ていくもの、雨も雪もつぎつぎといるいるなものをうるおしていく。同様に神の言葉もまた、そのようにさまざまの人、次々と時間を越えてうるおしていくという動的な本質を持っている。

そして、このことは、また神の言葉は、天地に響きつつ、世界を伝わっていくということが示されている。

また、正義も海の波のようにつぎつぎと押し寄せてくるという。この世では逆に不正がつねに大波のように一人一人や人間の組織、団体、そして

政治や国家全体にまで押し寄せている。そこで内戦が起り、多くの人たちが命をおとし、また生涯いやされないような傷を負ってしまう。

そのよつなこの世の大波のただなかで、正義の大波が寄せてくるという。それは驚くべき啓示である。

そしてまた、最もよきものといえるものは、風のごとく、また火のように注がれてくる。使徒言行録にあるようにそれによって使徒たちはイエスが殺されたという絶望感を越えて立ち上がりキリストの福音を命がけで伝えていくようになった。

そして、そこから真の平和主の平和が、たしかに世界中へと流れ続けていくようになった。

このように、神の国にあるもの平安、正義、また命の祝福等々は、あふれ続け、流れていく。さらに歴史を越えて

それは広がっていく。

そのような祝福のもとにあるのが、神の言葉に聴くということである。

あなた方が私の戒め(み言葉)に耳を傾けるならば、そのよつな祝福が注がれると記されている。(イザヤ書48の18-19)

聖書は全体としてみるとき、それは大いなる導きの書である。そのことと、神の言葉に聴くということが不可欠に結びついている。それは後の神への信仰のモデルとなったアブラハムの場合においてもはつきりと示されている。

創世記の冒頭にあるごとく、私たちは世界が闇であるからこそ、ぜひとも導かれる必要がある。

闇がいかに深くとも、神が光あれ！と言われるならたちまち光が存在し、私たちを導くのである。闇のなかの光こそ、私たちのさまよう歩みの前途を照らし、導くものとなる。

それゆえ、聖書巻頭の一句光あれ！はいっさいの導きを包含するものとなった。

この世界は闇である。何が正しいのか、どこに真実があるのか、本当に正しいことが勝つのか、愛はあるのか…あまりにも不正や悪事が個々の人間にもまた政治や社会、さらに国際的にも行なわれていて、わからないような状況である。それゆえに、創世記でも、マタイ福音書でもヨハネによる福音書でも、最初の部分でそのことが言われている。

：闇と混沌であった。神は言われた。光あれ！すると光があった。(創世記1の2～3)

：暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。「(マタイ4の16)

：光は闇の中で輝いている。暗闇は光にうち勝たなかった。

(ヨハネ1の5)

そのような闇だからこそ、その闇で人は霊的には(神の目から見て)命をうしなっていて、真実の愛や正しさ、清さ、勇気等々を持つことができなくなっている。

それゆえに、私たちには厳しすぎる表現と思われるほどであるが、「人はみなその罪のゆえに死んでいた。」(エペソ書2の1、5)とまで言われているのである。

そうした死に至る深い闇だからこそ、そこに神は光を与え、導こうとされる。

さらに一人一人を導くだけでなく、民族や国家、この世界全体を導いていかれる。このことは後に取り上げる。

聖書は大いなる導きの書である。個人だけでなく、民族や国家を導く光について記されている書である。

最初は、アブラハムを呼び出し、彼を導き約束の地へと導いた。それは後のさまざまの

個人や民族を導く象徴的なことであった。

そしてさらにこの世界全体、宇宙すらも神の大いなる御手によって導かれていくという、壮大な導きが聖書には記されているのである。

生きている神様に導かれて
中川陽子

私の最初の神様との関わりは、母からでした。母が無教会のクリスチャンで、高校生の時に担任だった吉村孝雄さんより伝道を受け、私や弟を生んだ後に神様を信じるようになり、導きを求めてキリスト教の本を買いに行ったりときに、徳島駅のバス停でばったり吉村さんに再会し、徳島聖書キリスト教会に行くようになっていました。

私や弟も集会に連れられて行っていたので、集会場から聞こえてくる讚美歌や、集会員の方々の雰囲気、母が本をよく読んでいたので、そういう中

で、キリスト教とは、静かだまじめで、少し堅苦しく、よく歌って、よく本を読む人たちというイメージがありました。

私が子供の時、初めて真剣に祈ったのは、母のキーホルダーを壊してしまった時です。見つかる前に壊れたところがくつつきますようにと、キーホルダーを握りしめて一生懸命祈ったのですが、そっと手を開いてもそれは壊れたままで、ごめんなさいと謝ることになりました。そのとき、やっぱりお祈りしても、こんな無茶なことは聴かれないんだなあと思つたことを覚えています。小さいときから私は自分の中に罪という大きな問題があることを強く意識し、いろいろなことに罪悪感を持つていました。また、朝早く起きるのは苦手でできないし、何をしてもうつかりして、行動もぐずぐずしていました。いろいろな事がよく分からなくて、他の子より劣っているような気が

がしました。小学校に入ると、母が歌謡曲やテレビ番組に触れさせるのを嫌がったので、そこでも他の子供たちと話題が合わなくなりました。

わたしは他の子たちが考えていることや暗黙のルールのよくなものが分からず、自分自身の性格の問題もありましたし、仲良くする方法が分からなくて、強い劣等感を持つようになりました。

聖書を開いて自分なりに読んでみたこともありましたが、イエス様の山上の教えに感動して、世の中の人が皆このように行動したら、この世界の問題は全部解決するのと思いました。でも、こうしなさいと言われても、自分にはできないことも思い、悲しくなりました。クリスチャンとは、これを全部守るうと決め、それを宣言した人たちなのだと思います。キリスト教に対する憧れがあるのに、そこは、清すぎて近寄れない、入り口が分からない世界に思

えました。

そんな私が、20歳の時に、家にあつたキリスト教の本に目を留め、ふと読んでみたくなつて手にとりました。マールン・キャロザースという牧師が書いた「賛美の力」という本です。

最初に、ある信者の証が書かれていて、分かりやすかつたので、引き込まれるように読みました。それは、困難に見えることに対してでも神様を信頼して心から感謝した人に、奇跡的な解決が与えられたという証でした。

子供の時にキーホルダーを直してくれなかつた神様は、もう今の時代には奇跡を起こせないのだと思つていたので、私は心底驚きました。それにキリスト教は山上の教えに書いてあつたようなことを守る宗教で、善いことをする、律法的なものだと思ひ込んでいたのです。

私はその本で、初めてキリス

ト教とは罪人の私たちのために、イエス様が十字架に架かつてくださることによつて、永遠の命を無償で与えてくださるものであるということを知りました。アブラハムの例が書いてあつて、アブラハムは人間的には問題もあつたけれど、ただ神様を信じるだけで義とされたとありました。私は幼い頃から自分の罪に悩んでいたので、こんな自分にも道が開かれ、助けてくださる神様がいることを知つて、本当に嬉しく思いました。信じただけでいいのなら、私にもできると思ひ、私もただ信じてそこに入れていただくと思ひました。それに、この証のように奇跡を起こせる生きた神様だつたら、ついていきたいと思ひました。

それでその日、その本を読み終わつてすぐ、母のところに行つて、「お母さん、私クリスチャンになる」と言ひました。母は突然のことでは半信半

疑でしたが、とても喜んでくれました。その後まもなく、父もいつの間にかイエス様を信じるようになっていました。その数カ月後、私は、神戸の大病院に就職し、看護師として働き始めました。そして、また人間関係でつまづいてしまいました。弱さを克服しようとして読んだ本には、「自意識過剰」とか「自己憐憫」など、厳しい言葉が並んでいて、それが分かつていても解決にはなりませんでした。

あの「賛美の力」の本に做つて、辛いことを感謝してみようとしてみましたが、どうしても本心からはできず、感謝するふりをして状況を変えて貰おうとする姑息な手段は神様には通じませんでした。

今思えば、職場に適應できなかったのも大きかつたと思ひます。私は当時看護師になる最短コースと呼ばれた進路で高校卒業と同時に准看護師資格を得、その後2年制の看護

学校を出て正看護師になりましたが、周囲は3年制の専門学校や短大を出た人ばかりでした。今は更に4年制の看護大学の時代となりました。

私が最初に配属された心臓血管外科の病棟は急変の多い部署なので緊張度が高く、先輩の指導も非常に厳しいものでした。最初の研修で配属部署が発表されると、周囲にいた、その病院の付属短大を出た人たちから一斉に「気の毒に」と言われて驚きましたが、入つてみると理由が分かりました。

朝から晩まで叱られ、否定され、心はポロポロになりました。私は田舎者の小心者で、上手に対応できなかったため、その状態は長く続きました。同期の子は一人辞め、翌年入つた新人も皆辞めました。当時私は、両親に石の上にも3年、と約束していたし、一人前になるまで仕事を辞めてはいけないと考へていたので、そんな中で仕事を覚えながら何と

か適応しようと努力しました。夜勤も多かったので、体も疲れ果て、もともと胃腸が弱かったのですが、過敏性大腸症候群や不眠症にもなりました。私はとにかく早く年を取りたいと思い、まるで捨て去るかのような気持ちで年を重ねていきました。

1年でも職場で経験年数を重ねたら、いじめられなくなり、仕事ももっとできるようになって、楽になれると思っただけでした。もうひとつ悩んでいたのは、自分の愛のなさです。看護師の仕事は日々患者さん何かを求められ、それに対応していかなければいけないのですが、もっと患者さんを愛さなくてはいけないのに、患者さんの要求に応えきれない、自分には愛が足りないという悩みがありました。看護師の仕事で一番苦しかったのは、日々自分の愛のなさをまざまざと見せられ、痛感させられることでした。

当時無教会の集会在近くになく、電車に乗ることも苦手だったので、時々しか大阪の狭山集会まで行くことができませんでした。近くで教会に行こうとしました。

しかしここでは、洗礼を受けなければ、クリスチャンではなく求道者と呼ばれるということを知りました。どこに行っても信仰の話ではなく、まずは洗礼の話になり、教会の人にとって、洗礼を受けているかどうかが非常に大切なことであるということを知りました。

それでは洗礼を受けていない人はクリスチャンではないのか、両親も、集会員の人も、吉村さんも、本当のクリスチャンじゃないのか？と悩みました。私が子供のころから知っている、あのまじめで優しく、信仰に熱心な人たちが、神様に覚えられておらず、救われていないとは到底思えませんでした。

吉村さんをはじめ、いろんな

人に質問しましたが、まだ私には理解できないことが多く、誰が本当のことを言っているのか判断できず、とても悩みました。

私は信じるだけで無償で救われることを読んで、この信仰の世界に入ってきたけど、洗礼を受けなければ天国に行けない、永遠の命がいただけないとなると大問題です。一度は悩みを解決するためだけに洗礼を受けようとしたこともありましたが、どうしても納得できずに止めました。

教会でのお話も、私が当時実生活で悩んでいることの力にはなりません。エゼキエル書37章に、枯れた骨が出てきますが、人間関係で躓いて身体も弱った私が骨の状態なら、キリスト教にも居場所がないように感じた私は枯れた骨でした。救われた最初の喜びからはほど遠く、再び律法的に自分を責め、キリスト教が理解できず、劣等感の

塊で、完全に道を見失ってしまいました。そんなこんなで看護師になって9年程経っていました。

そんな時、徳島で行われた無教会のキリスト教四国集會に参加しました。そこには何となくゆったりとした清らかな、特別な空気が流れていました。私は人に会うのが嫌で、あまり周囲と関わりたくなく、それでも見た目はカラ元気を出すという感じで、壁の内側から周囲を観察しているような感じでした。

その日、講話が始まると、みなさんが前を向いて熱心に聞き始めました。その瞬間、一人ひとりが心を、上における神様に向けて、じつと神様に聞き入るうとしていように感じました。その時、ハツとするものがありました。みんな、ただ人間的な思いで、人に会いに来ているのではない、神様に会いに来ている。一人ひとりにその人自身の課

題があつて、そこに働く生き
た神様の働きを待つているの
だと思ひました。そう気付く
と、私は心底ホツとする感じ
を受けました。みんなが人間
を見つめず、神様のほうを向
いているその空間が、とても
居心地が良いものと感じまし
た。

そして、その時、私は初めて
聖霊というものを感じて、そ
れを受けることができました。
それは言葉で言い表しにくい
ですが、理屈ではない大きな
喜びで満たされているという
体験でした。その喜びは、地
上の喜びとはまったく違った
種類のものです、この喜びと他
の物を交換するのは嫌だとい
う思いもしました。

それが私の大きな転機にな
りました。聖霊を受けたその
時から、洗礼を受けるかどう
かということ、まったく問
題ではなくりました。人が
私に対して何を思おうと一切
関係なく、イエス様が救って
くださったものを覆したりで

きないことが分かり不安がな
くなりました。そして私の霊
的な居場所は、この無教会の、
小さい頃から知っていた、徳
島聖書キリスト集会であると
いうことがその時はっきりと
分かりました。

それから、徳島に帰省の際に
日曜の礼拝に行き、神戸でも
集会が与えられ、交代勤務で
はありましたが週1回くらい
のペースで何らかの形で礼拝
に出ることができるようにな
りました。

仕事では、私は集中治療室
に配属されました。看護師と
していつかは働いてみたいと
思つた部署でした。ところが、
すでに経験年数は9年経つて
いても、ICUでは再びひよつ
こ扱いでした。また、人間関
係で再び悩まされました。と
にかく同僚の看護師の方々は
気が強くて、知識の誇りあい
という状態でした。あまりに
殺伐としていて心が挫けそう
になりました。

しかし、信仰的な転機を迎え

ていた私は、その悩みや苦し
みを、信仰で解決しようとす
ることができました。講話を
聴くときの姿勢も、今の自分
の問題を解決するためのので、
一生懸命自分のこととして聞
きました。仕事に行く前は胸
がドキドキして不安になりま
す。そういう時は聖書を必死
で読みました。詩篇の作者の
うめきが、私のうめきと重な
るように思ひました。

そして、「私の敵の前で、私の
食卓を整えてくださる」とい
う詩篇23篇5節の御言葉が深
い慰めとなり、それを信じる
ことができました。自分に冷
たい態度を取る人、敵対する
人のことを祈り、できるだけ
愛をもつて接するように努め
ました。

ある時、土師記7章のところ
が、目に留まりました。神様
は戦いに挑むギデオンに、こ
のように言われました。「あ
なたの率いる民は多すぎるの
で、ミディアン人をその手に
渡すわけにはいけない。渡せ

ば、イスラエルはわたしに向
かって心がおごり、自分の手
で救いを勝ち取つたと言うで
あろう。」そして兵士が減ら
され、神様はまた言われまし
た。「民はまだ多すぎる。彼
らを連れて水辺に下れ」そし
て水の飲み方で兵士は選り分
けられ、神様は兵士を3百人
までわざわざ減らされました。
それを読んだ時、その神様の
なさり方に、とても驚きまし
た。

そして、目の前の問題がいか
に自分にとつて大きく見え、
それに比べて私がいかに非力
であつても、神様のお力はそ
んなものを越えて勝つのだか
ら、そのことを信じよう！と
思うことができました。それ
は、自分の力に頼らず、信仰
によつて神様のお力によつて、
救つていただくという良いレッ
スンになりました。

私は最後の5年間集中治療
室にいましたが、もうこれで
限界というところが来たので、
病院を辞めることにしました。

辞める時に、私にずっとても冷たい態度をとってきた人が、ためらいながら、「辞めるの？」と話しかけてきました。私は明るく「はい。徳島に帰って、母がしているケアマネの仕事を手伝おうと思っています。」と答えました。すると、その人は「中川さんだったら、優しいからどんな仕事をしてもうまく行くと思っよう」と言ってくれました。私はそれをその人の精いつぱいの謝罪と愛だと受け止めました。そして、ずっとその人

にできるだけ愛をもって接してきたことが、実は伝わっていたことも知ることができました。こうして、私の、病院での自分の課題との戦いは終わりました。そしてそれが、今、私のかけがえのない経験として、仕事上の、そして心の大切な宝物となっています。今、わたしは母が起こした、有限会社マンナ在宅支援ミルトスという、聖書から名前をいただいた会社で、ケアマネ

ジャーとして母と二人で働いています。あの病院でとても厳しい訓練を受けたことが、今、一人ひとりの利用者さんの生活を支援する上で、とても役立っています。そして、看護師だったときに愛が足りないと感じたことを元に、今、できるだけ仕事では一つ一つのことに私なりに愛を込めたいと願っています。利用者さんやそのご家族は、神様が意味あつて私に出会わされた隣人であると思うからです。今こうして、神様に繋がり、自由に仕事ができる環境を感じ謝します。日常の業務の些細なこと、神様は驚くほど私

に解決できたということもありました。解決不可能と思われた難しい問題も、神様は必ず解決を与えて下さいました。私達は罪人で十分なことができませんが、神様はいつも私たちを助け励まし、私たちができる以上のことを与えて下さっていると思います。母と二人の小さい会社ですが、今では地域の中核病院や市役所関係からも困難事例と言われる仕事を任せていただけるようになりました。子供のころから「枯れた骨」のような苦しさを経験し、自分なりのどん底感を体験しましたが、わたしは神様の吹か

れる、霊の風によって生き返りました。私の杯は、今溢れていると思えます。今も自分の罪に苦しみ、課題がたくさんあります。それはそのまま神様に「わたしにはこのよ

うな問題があります」と言っています。すると、神様は聖書だけでなく、さまざまな本

や、経験から私に色々なことを教えてくださり、方向を示してくださいます。

過去に、私は問題に対し、表面的に感謝することで、神様をコントロールしようとして失敗しました。今でも嫌なことがあれば、すぐに神様に感謝するのは難しく、時間がかかることがあります。なるべく起こったことや、嫌な気持ちそのものも神様に感謝するようにしています。その嫌な気持ち、御心になつた道を歩むために神様を求めさせ、それによって何か新しいことが示されたり、教えられ

るといふことに、気づいたからです。痛みがあれば、そこに祈りが生まれ、神様との関係が発展していきます。私はまだ、そのことを小さい範囲の、仕事の面でしかできていませんが、

いままでの歩みを振り返るとき、すべて私たちの背後で、生きていくキリストが導いてくださったことを感じます。

これからも、自分の思いを超えて、クリスチャンとして神様ご自身が成長させてくださると信じています。

(2015年10月 千葉県で開催された無教会全国集会のときに語った証しに若干の追加したもの)

こぶせ

(392) 罪人の一人とされること

どんなに正しい人でも、その生涯のうちいつかは、「罪人のひとりに数えられる」にちがいない(マルコによる福音書15の28)。

もしこのことが起らなければ、かえってよい徴候とはいえない。このような場合神を慰めとして持つならば、すなわち、あらゆる人間的批判をはるかに越えて力づけ給う神の慰めと、この助けを確信することから生じる清らかな良心(真にはない)とを与えられるな

らば、世人の批判にも容易に堪えられ、それも想像していたほど悪いものでも危険でもないことを悟るであろう。

ひとはこのような経験を経ることによつてはじめて勇気ある人間となり、神がその戦いに用いることのできる者となる。それまでは、どんな人もみな臆病者であつて、いざという時に神の味方に立つことを恐れるのである。(眠られぬ夜のために上 4月5日 ヒルティ著 岩波文庫118頁)

・キリストは、ヒルティの言う罪人の一人とされた。その他歴史のなかで無数のキリスト者たちはそのような罪人とされ、苦しめられ、殺されることさえ多かつた。

キリストは弱き人々、苦しむ人々を助け、いやし、また真理そのものの神の言葉を語つたが、弟子の一人に金で売り渡され、当時の律法学者、宗教学家からは神を冒瀆したとい

う最も重い罪をきせられ、長老、さらには民衆やローマ兵にまであざけられ、弟子たちはみな逃げてしまった。あらゆる苦しみを受けて地を去られた。

しかし、神はそうした真理の証人たるキリストを復活させ、不滅のものとされ、そのキリストを永遠の存在として世界に告げ知らせるよう導かれた。

私たちもまた、不当な悪口、非難を受けたとしても主からのものでして受けるよう導かれるし、また私たちの罪ゆえにそのようなことも生じるのだとの思い、さらに主に立ち返るようにながされる。

お知らせ

○吉村孝雄の12月の神戸市、大阪府高槻市での聖書講話

日時: 12月13日(日)

・阪神エクレシアでの集会

午前10時〜12時。(問い合わせは、川端紀子メール hichisan-toshisan@ezweb.ne.jp 場所: 兵庫県私学会館神戸市中央区北長狭通丁目3-13 TEL (078)331-6623 元町駅から歩いて5分)

・高槻聖書キリスト集会 午後2時〜4時(場所: 高槻市塚原5-8-5 那須宅。問い合わせ(那須) 電話090-1585-5720 メール n_nmyms@yahoo.co.jp)

○静岡クリスマスマズ講演会
講演題と講師

・「この世の宝物」 西澤正文
・「闇と混乱の中の光」 キリストと聖書」 吉村孝雄

・日時: 2015年12月5日(土) 13時30分〜16時

・会場: 清水テルサ6階 研修室。静岡市清水区島崎町22
3 電話054 355 31
11

・参加費: 無料(自由献金)
・連絡先: 西澤 正文 電話0

54 363 0456

○クリスマス特別集会…12月20日午前10時。場所 徳島聖書キリスト集会場

徳島 アネックス(アネックスとは別館の意) 〒770-0824 徳島市南出来島2丁目7-1 徳島駅から歩いて10分程度。

【TEL】 088-622-2333 【FAX】

088-622-2314

○キヤロリング…12月24日午後7時～8時半ころ。問い合わせ 綱野悦子 088-641-4170

そのために夏、秋を避けて、気候もよいとき、かつ大型連休の後で交通や宿泊も比較的混雑していないと思われる5月開催としています。

○集会場での宿泊の案内

徳島聖書キリスト集会場の宿泊も、宿泊だけが次のように申込できません。

部屋は、畳敷と絨毯の部屋、または板張りの床です。

ホテル以外に、当集会場(男女分かれて2か所の一軒家)にて以下の条件で宿泊することができまので、希望者はお申し込みください。先着順です。

・料金は全部で2500円。(布団リース代。3泊4日以内で何泊でも同じ料金。ホテルと集会場での宿泊の組み合わせも可)駐車場あり。

・女性5名程度、男性10名程度。利用人数によって相部屋となります。家族・友人等で同室も可。

・会場ホテルやJR徳島駅よりタクシーで約10分の距離です。徳島駅から2キロ。徒歩では30分の場所です。各自で移動して下さい。(徳島県徳島市南田宮1丁目1-47 徳島市バス中吉野町4丁目下車 徒歩四分。)

・浴室は使えないが、すぐ横に大型の温泉施設あり。(入館料平日600円、土日祝日750円8:00～深夜1時まで営業、タオル販売あり。)

・調理はできないが、近隣に多数の食堂・飲食店・コンビニ等あり。

・布団・シーツ・枕はリースにて清潔なものを用意。タオル・パジャマ等は各自で用意ください。

・お世話係はおりませんので、ゴミの管理、戸締り、電気、ガス、水道、布団の管理などを責任を持ってくださる方。敷地内は禁酒禁煙で近隣に迷惑をかけない方。

正式の案内、申込書は、年内に送付予定です。問い合わせは吉村孝雄まで。連絡先は「いのちの水」誌奥付にあります。吉村の携帯は、080-6284-3712です。

その予約枠を超えますと、各自でこの会場のホテル以外の近隣のビジネスホテルなどを予約していただくこととなります。

・5月に開催するのは、夏や秋では台風の影響があり、以前にも四国集会のとき台風のためにほとんどの参加者が参加できなくなったことがあり、

.....

○新発売の聖書講話CD。
 (MP3版、聖書講話者 吉村孝雄) 価格はいずれも送料込
 サムエル記(全2巻) 全5
 7講話(32時間14分)
 サムエル記上 34講話(1
 9時間54分) 価格千円。
 サムエル記下 23講話(1
 2時間20分) 価格千円
 申命記(全2巻) 53講話
 (27時間36分) Disk.1 =
 42講話(22時間30分)
 Disk.2 = 11講話(5時間6
 分) 価格千円
 ・サムエル記は、預言者サム
 エルの子供時代からはじまり、
 ダビデもまた羊飼いの少年で
 あったときのことからかき始
 め、いかに神のしもべとして
 歩んでいくか、王サウルから
 の迫害のもと、あくまで神に
 頼り、サウル王に対しては無
 抵抗に徹し、神の導きによっ
 て王となつたかが記されてい
 る。

の嵐に巻き込まれていく姿が
 記され、その中であつて、神
 に従つて必死に生きていこう
 とする姿が並行して描かれて
 いる。この世の闇の力によつ
 て大きな打撃を受けて苦しみ
 つつ、主に向つて叫び、また
 賛美する心を映したのが詩篇
 の原型となつた。そしてそれ
 は旧約聖書の心臓とも言われ
 るほどに重要な文書となり、
 無数の讚美歌、聖歌の源流と
 なつた重要なものが生み出さ
 れることとなつた。

詩篇の背景を知るためにも、
 キリストの先祖としてのダビ
 デの信仰による生涯を知るた
 めにも不可欠の書である。
 しかし、サムエル記の究極の
 目的はサウルやダビデ等々の
 人間を描くのが目的でなく、
 そうしたさまさまの人間を導
 き、恵みを与え、また裁きを
 与える神の大きな御手のはた
 らきを浮かび上がらせ、この
 世界は、人間の計画や策略、
 富や軍事等々によつてでなく、
 神の御支配のうちに置かれて
 いることを示すものとなつて
 いて、それは後に現れるキリ
 ストを指し示すことにもつな
 がっている。

・申命記は、一般的にはキリ
 スト者の間でさえ、愛読され
 ているとは言いがたいである
 う。
 しかし、最も大切な戒めとし
 て主イエスがとりだされた
 「心を尽くし、思いを尽くし、
 精神を尽くして神の愛せよ」
 という言葉は、旧約聖書の最
 初の5つの書(創世記、出エ
 ジプト記、レビ記、民数記、
 申命記)という多くの内容の
 中から、申命記にあり、その
 6章5節、13章4節などが
 らの引用である。
 また、伝道の最初にあつて
 サタンからの試練に遭われた
 が、そのときに言われた言葉
 で広く知られているのが、
 「人はパンだけで生きるの
 ではない。神の口から出る一つ
 つの言葉で生きる」であつ
 た。これは申命記の8章3節
 の言葉である。また、その試
 みのとき言われた別の言葉は、
 「あなたたちの神、主を試し
 てはならない」であつたが、
 これも申命記の6章の16節
 からの言葉である。
 さらに、申命記には、主の御
 声に聞くことの重要性が繰り
 返し強調されている。これほ
 どこのことをいわば情熱的に
 語りかけている箇所はほかに
 ないほどである。
 申命記28章、30章には、
 主の御声に聞く(聞き従う)
 ということが、1、2、13、
 45、62などの節、30章
 では10、20節など、現代
 の私たちにも、神のあつい思
 いが伝わってくるほどである。
 この主のみ声に聞くことの
 特別な重要性が、ルカ福音書
 のマルタとマリアの記述のな
 かで、マリアが、イエスを接
 待することもおいて、イエス
 の話しに聞き入っていたこと、
 姉妹マルタの非難にもかかわ
 らず、主イエスは、よきもの
 を選んだ、なくてはならぬもの

は一つだけだと言われて、マリアの真剣に御言に聞こうとする姿勢の重要性を語られたのだった。(ルカ福音書10の38〜42)

このように、申命記は、以外なほどに、新約聖書のキリストによって引用されているのがわかる。これは、キリストの心のなかに、申命記の内容が深く刻まれていたことを示すものである。

旧約聖書にはしばしば、現代の私たちの感覚からは驚くようなことが記されていたり、受け入れがたいというような箇所もあるために、敬遠されていることが多い。

しかし、前記のように主イエスが重んじられていたゆえに私たちもまた、この書を重んじて深く読むことが求められている。

○第18回 冬季聖書集会
・テーマ「神、われらと共に

あり」

・日時：2016年1月9日
(土) 13時30分受付 14
時開会〜11日(月) 13時
解散。

・会場：上郷(かみごう)森
の家 横浜市栄区上郷町14
99の1 電話045 895
5151

・講師：吉村 孝雄(徳島聖書
キリスト集会代表)

・会費：大人19000円、
学生5000円

・日帰り参加：10000円+
食事代

・なお、福島、長野以北、岐
阜以南の遠方の参加の方々の
会費は、3000円軽減しま
す。

・持ち物：聖書、讃美歌、筆
記用具、着替えなど。タオル、
浴衣、歯ブラシ、シャンプー
などは、施設についている。
・問い合わせ：土屋 聡 〒

299 0127 千葉県市原
市桜台1の11の2

電話 0436 66 559
3 メール samenikeno@tutiya@yahoo.co.jp

・申込先：関 聡 〒387
0015 長野県千曲市鋳物師
屋62の3

FAX 026 274 31
31 メール

sekisat@mx2.avis.ne.jp
・参加費は、当日受付で支払っ
てください。なお、申込後の
キャンセルは規定のキャンセ
ル料金をお支払いねがいます
ので、御了承ください。

・大学生の参加費は、キリス
ト教独立伝道会と徳島聖書キ
リスト集会の援助により低料
金となっています。日帰り参
加も歓迎しています。

12月20日までに郵便、F
AX、メールで申してください。

徳島聖書キリスト集会案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47
徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分
(二) 夕拝 第一火曜、第三火曜、夜7
時30分から。 毎月第四火曜日の夕拝
は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町
のちのさと作業所、吉野川市鴨島町の
川宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市
南町の熊井宅)です。

その他、ダンテの神曲(煉獄篇)の読
書会が毎月第三日曜日午後一時半より、
第二、第四土曜日の午後二時からの手話
と植物、聖書の会、第二、第四水曜日午
後一時からの集会在集会場にて。また家
庭集会是、板野郡北島町の戸川宅(第2
、第4の月曜日午後一時よりと第二水曜
日夜七時三十分より)

・海陽集會、海部郡海陽町の讃美堂・数
度宅(第二火曜日午前十時より)、
いのちのさと集會：徳島市国府町(毎
月第一、第三木曜日午後七時三十分より
「いのちのさと」作業所)、・藍住集會
：第二、第四月曜日の午前十時より板野
郡藍住町的美谷サロン・ルカ(笠原宅)、
徳島市心神町の天室堂での集會(網野宅)
：毎月第二金曜日午後8時)、・徳島市
南島田町の鈴木ハリ治療院での集會：毎
月第一月曜午後3時〜などで行われてい
ます。また祈禱会が月二回あり、毎月一
度、徳島大学病院8階個室での集まりも
あります。問い合わせは左記へ。

著者・発行人 吉村孝雄 〒777-0001 小松島市中田町字西山九一の一四 電話 050-1163-4962 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)
郵便振替口座 ○一六三〇一五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で発行人宛に送って下さい。
(これらは、いずれも郵便局で扱っています。) E-mail: pististy@hotmail.com <http://pistis.jp> FAX 0885-32-3017